知っていますか「碓氷製糸」

JR西松井田駅の南西、緑に囲まれた妙義山のふもとにある碓氷製糸。すぐ脇に碓氷川が流れる。大量の水を使う製糸工場には、なくてはならない存在。

上毛かるたの「に」で群馬県民になじみ深い富岡製糸場。明治5(1872)年、政府によってつくられた、当時世界最大級の近代化モデル工場は、最先端の技術をもって国内の養蚕・製糸業を世界一の水準まで高めました。この施設が世界文化遺産に登録されて10年余り。約40年前に操業を停止してしまいましたが、今も残る創業当時の建物の姿を見ようと、多くの人が訪れています。

では、妙義山を間近にのぞむ、碓氷川のほど近くに国産生糸の約7割を生産する国内最大の製糸工場があること、そこでは富岡製糸場で展示されている機械が今も現役で動いていることをご存じですか。今回は、先人の技術と伝統を守りつつ新たな試みにも挑戦する「碓氷製糸」を紹介します。

■碓氷製糸の歴史

碓氷製糸は昭和34(1959)年、碓氷安中地域の養蚕農家が自分たちの手で生糸を作ろうと設立した農業協同組合(農協)です。やがて、生産者の高齢化などで繭の収量が減少すると、農協のままでは地元以外の繭を扱う量に制限があるため株式会社に変更し、これにより全国の繭を扱えるようになりました。

現在、国内で稼働する器械製糸工場(＝輸出用生糸を作れる大型工場)は2社のみで、そのうち碓氷製糸は国産生糸の約7割を生産し、全国に出荷しています。

半世紀近く前に作られた日産自動車製自動繰糸(そうし)機。「自動で生糸を挽(ひ)くのは人類に不可能」と言われながらも、日本が世界に先駆けて完成させ、大量の生糸生産を可能にした。後に輸出され、世界のシルク産業を支えた。同型が富岡製糸場繰糸場にあるが停止状態で展示中。碓氷製糸では整備をしながら、今も現役で稼働している。